

令和7年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第4号（8月予報）

令和7年7月29日 秋田県病虫害防除所

- ◇今回の予報対象期間は8月を主とします。次回の発表は令和7年8月26日の予定です。
- ◇病虫害発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトでご覧いただけます。
<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>
- ◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>
- ◇秋田県総合防除計画を策定しました。本計画は秋田県公式ウェブサイトでご覧いただけます。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archives/4233>



秋田県病虫害防除所
トップページ

I. 予報の要点

水 稲	穂いもちの発生量はやや多いと予想されます。7月25日発表の防除対策情報第8号を参照して防除してください。 斑点米カメムシ類の発生量はやや多いと予想されます。出穂期の把握に努め、出穂期10日後頃の茎葉散布剤による防除と散布当日から7日後までの畦畔や農道の草刈りを実施してください。
大 豆	紫斑病の感染量は多いと予想されます。開花期20～30日後に薬剤を莢によく付着するように散布してください。 吸実性カメムシ類の発生量は多いと予想されますので、適期に防除してください。
野 菜	病害では、きゅうりの褐斑病の発生量が多いと予想されます。発病した葉は除去した上で薬剤防除を実施してください。 ねぎのアザミウマ類、シロイチモジヨトウ及びトマトのアザミウマ類の発生量が多いと予想されます。発生状況を確認して防除してください。
果 樹	病害では、りんごの褐斑病の発生量がやや多いと予想されます。不要な徒長枝を除去し、多発が予想される場合は、ユニックス顆粒水和剤47又はオンリーワンフロアブルを散布してください。 害虫では、りんごとなしのシンクイムシ類、ハダニ類、果樹カメムシ類の発生量が多いと予想されます。発生が多い園地では直ちに薬剤防除をしてください。果樹カメムシ類については7月25日発表の注意報第3号を参照し、防除対策を徹底してください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病（穂いもち）	全県	早い	—	やや多い
	紋枯病	全県	—	平年並	やや多い
	ごま葉枯病（穂枯れ）	全県	早い	平年並	やや多い
	コブノメイガ（第2世代）	全県	早い	多い	多い
	セジロウンカ（第2世代）	全県	早い	やや少ない	平年並
	斑点米カメムシ類（第2世代成虫）	全県	早い	やや少ない	やや多い
	（アカスジカスミカメ）		早い	やや少ない	やや多い
	（アカヒゲホソミドリカスミカメ）		早い	少ない	平年並
大 豆	紫斑病（子実）	全県	やや早い	—	多い
	ウコンノメイガ	全県	—	平年並	平年並
	アブラムシ類 （ジャガイモヒゲナガアブラムシ）	全県	—	やや少ない	やや少ない
	（ダイズアブラムシ）		—	やや少ない	少ない
			—	平年並	やや多い
	吸実性カメムシ類 （ホソヘリカメムシ）	全県	—	多い	多い
	フタスジヒメハムシ	全県	—	—	多い
	マメシンクイガ	全県	平年並	—	平年並
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	平年並	やや多い
ねぎ （夏どり）	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	やや多い	やや多い
	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	平年並
	アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	全県	—	多い	多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや少ない	平年並
ねぎ （秋冬どり）	シロイチモジヨトウ	全県	—	多い	多い
	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	平年並
	アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	全県	—	多い	多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	平年並	やや多い
きゅうり	シロイチモジヨトウ	全県	—	多い	多い
	べと病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	うどんこ病	全県	—	平年並	平年並
	褐斑病	全県	—	やや多い	多い
	斑点細菌病	全県	—	少ない	少ない
	炭疽病	全県	—	やや少ない	平年並
	アブラムシ類 （ワタアブラムシ）	全県	—	少ない	やや少ない
	ワタヘリクロノメイガ	その他	—	やや少ない	平年並
トマト	葉かび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	すすかび病	全県	—	平年並	平年並
	灰色かび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	うどんこ病	全県	—	平年並	やや多い
	アザミウマ類 （ヒラズハナアザミウマ）	全県	—	多い	多い
えだまめ	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	やや多い	やや多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	平年並	やや多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	—	やや多い
	ハスモンヨトウ	全県	—	—	やや少ない
りんご	斑点落葉病	全県	—	平年並	平年並
	黒星病	全県	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	—	平年並	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	やや多い	やや多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	やや多い	多い
	ハダニ類 (ナミハダニ、 リンゴハダニ)	全県	—	やや多い	多い
	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメム シ、クサギカメムシ)	全県	—	多い	多い
	キンモンホソガ	全県	—	やや少ない	平年並
な し	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	少ない
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	多い
	ハダニ類 (ナミハダニ、 リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	やや多い	多い
	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメム シ、クサギカメムシ)	県北部・県中央部	—	やや多い	多い
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	平年並
	灰色かび病	県南部	—	平年並	平年並
	晩腐病	県南部	—	—	少ない
	アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	県南部	—	平年並	平年並

Ⅲ．発生予報と防除対策

A 水稻

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 いもち病（穂いもち）	早い（－）	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ ７月18日発表の作況ニュース第６号によると、水稻の生育はやや早くなっている（－/ ）。

ウ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における葉いもちの発病株率は1.8%（平年2.5%）で平年並、同地点率は17.5%（平年13.5%）でやや高かった。穂いもちの主な伝染源となる上位２葉の葉いもちの発病株率は0.3%（平年0.2%）とやや高く、同地点率は6.3%（平年2.8%）で高かった。地域別では、県北部の発病株率が5.9%（平年2.3%）、同地点率は47.8%（平年16.5%）でいずれも高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ７月25日発表の防除対策情報第８号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 紋枯病	－	やや多い（－）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における発病株率は1.2%（平年1.8%）、同地点率は12.5%（平年14.7%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

イ 本年は出穂期が早まると見込まれることから、防除時期を逸しないように注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ごま葉枯病（穂枯れ）	早い（－）	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/+）。

イ ７月18日発表の作況ニュース第６号によると、水稻の生育はやや早くなっている（－/ ）。

ウ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における発病株率は0.5%（平年0%）、同地点率は3.8%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 砂質でかつ秋落ちが認められる水田で、過去に発病履歴がある場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブル又はブラシNFLフロアブルを散布する。

- イ 発病履歴がない場合でも幼穂形成期～穂ばらみ期に発病が見られた場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブル又はブラシンフロアブルを散布する。
- ウ 本年は出穂期が早まると見込まれることから、防除時期を逸しないように注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 コブノメイガ（第2世代）	早い（－）	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（－/+）。
- イ ７月２～３半旬の巡回調査で老齢幼虫が確認されたことから、有効積算温度計算シミュレーション（J P P－N E T、気象観測地点：秋田）による第１世代成虫の羽化始期を推定したところ、７月21日（平年推定羽化始期８月１日）と早かった（－/ ）。
- ウ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における食害株率は0.2％（平年0.1％）でやや高く、同地点率は6.3％（平年1.0％）で高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多肥により葉色が濃いと被害が出やすいため、適正な施肥量とする。
- イ 早期発見に努め、幼虫のふ化初期にパダン粉剤D L、パダンS G水溶剤のいずれかを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 セジロウンカ（第2世代）	早い（前年より早い）	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 秋田市予察ほの初飛来は６月22日（平年６月28日）で早かった（－/+）。
- ウ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における本田のすくい取り調査の成幼虫数は0.3頭（平年1.8頭）でやや少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 有効積算温度計算シミュレーション（J P P－N E T、気象観測地点：秋田）による初飛来時期を起点とした第２世代幼虫の発生時期は、８月８日頃と推定される。
- イ 本虫の第２世代における要防除密度の暫定値は、中老齢幼虫が株当たり25頭以上（粘着板法四株叩き式では全幼虫数が株当たり50頭以上）である。
- ウ 出穂期10日後頃にアルバリン/スタークル剤により斑点米カメムシ類の防除を実施した場合は、本虫を対象とした薬剤防除の必要はない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 斑点米カメムシ類（第2世代成虫） （アカスジカスミカメ） （アカヒゲホソミドリカスミカメ）	早い（前年並） 早い（前年並） 早い（前年並）	やや多い（前年よりやや多い） やや多い（前年よりやや多い） 平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/+）。

イ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における畦畔でのアカスジカスミカメ（以下、アカスジ）のすくい取り数は0.8頭（平年3.0頭）でやや少なく、発生地点率は15.0％（平年19.3％）でやや低かった（－）。アカヒゲホソミドリカスミカメ（以下、アカヒゲ）のすくい取り数は0.7頭（平年2.6頭）で少なく、発生地点率は11.3％（平年32.1％）で低かった（－）。

同調査における水田内でのアカスジのすくい取り数は0.3頭（平年0.5頭）でやや少なく、発生地点率は7.5％（平年9.8％）でやや低かった（－）。アカヒゲのすくい取り数は0.1頭（平年0.2頭）でやや少なく、発生地点率は8.8％（平年11.8％）でやや低かった（－）。

ウ 予察灯調査（6地点）における７月１～４半旬の総誘殺数は、アカスジが752頭（平年147.4頭）で多い（＋）、アカヒゲが715頭（平年802.5頭）で平年並だった（±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 水稻の出穂期（ほ場全体の40～50％が出穂した日）の把握に努め、出穂期10日後頃にアルバリオン/スタークル剤を、畦畔を含めたほ場全体に茎葉散布する。

イ アの散布当日から７日後までに畦畔や農道の草刈りを必ず行い、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物を除去する。

ウ 水田内に出穂したノビエやホタルイなどが発生しているほ場、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接しているほ場では、出穂期10日後頃の薬剤防除に加えて同24日後頃にもエクシード剤又はキラップ剤を茎葉散布する。ただし、セジロウンカが多発しているほ場では、同時防除が可能なエクシード剤を選択する。

７ その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ニカメイガ （２回発生地帯の 第２世代）	－	平年並	平年並	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
トビイロウンカ	－	平年並	平年並	７月４半旬まで飛来は確認されていない。
ヒメトビウンカ	－	平年並	平年並	斑点米カメムシ類との同時防除に努める。
ツマグロヨコバイ	－	平年並	平年並	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
フタオビコヤガ （第３世代）	－	やや少ない	やや少ない	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
アワヨトウ （第１世代）	－	平年並	平年並	７月23日現在、飛来は確認されていない。 今後の予察情報に注意する。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1 紫斑病（子実）	やや早い（－）	多い（－）

（１）予報の根拠

ア 7月18日発表の作況ニュース第6号によると、大豆の生育は進んでおり、開花期が早まると予想される（－/－）。

イ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

ウ 前年収穫期の被害粒率から、越冬伝染源量は多いと推定される（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 開花期20～30日後にジマンダイセン水和剤（RACコード：M3）、ペンコゼブ水和剤（同：M3）、トライフロアブル（同：U16）、ニマイバー水和剤（同：10・1）、フセキフロアブル（同：53）、プランダム乳剤25（同：3）、クミガードSC（同：M1）、Zボルドー（同：M1）、Zボルドー粉剤DL（同：M1）のいずれかを散布する。ただし、着莢期に降雨が多い場合は、1回目散布の約10日後に追加防除を行う。

イ RACコードが1、3、10、53、U16の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため、各1回の使用とする。

ウ 無人航空機で防除する場合は、ニマイバー水和剤、フセキフロアブル、プランダム乳剤25のいずれかを各1回使用し、2回散布を基本とする。

エ ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は使用時期に注意する（収穫45日前まで）。

オ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

カ 本年は開花期が早まると見込まれることから、防除時期を逸しないように注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ウコンノメイガ	－	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月下旬の巡回調査（16地点）における叩き出し成虫数は0.02頭（平年0.71頭）で少なく、茎当たり卵塊数は0.02個（平年0.03個）で平年並、葉巻発生株率は8.5%（平年6.7%）で平年並、同発生地点率は31.3%（平年46.9%）でやや低かった（ /±）。

ウ 予察灯調査（6地点）における7月1～4半旬の総誘殺数は0頭（平年8.1頭）で少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 被害は生育が旺盛なほ場で多い傾向にあるので、よくほ場を観察する。

イ 7月6半旬には場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上ある場合は、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、プレバソンプロアブル5のいずれかを散布する。

ウ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤又はプレバソンプロアブル5を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	—	やや少ない (前年並) 少ない (前年よりやや少ない) やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (ジャガイモヒゲナガアブラムシ (/-)、ダイズアブラムシ (/+))。

イ 秋田市予察ほにおける7月5半旬の発生株率はジャガイモヒゲナガアブラムシが0% (平年2.1%) でやや低い (/-)、ダイズアブラムシが0% (平年2.9%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多く見られる場合は、アグロスリン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	—	多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 秋田市予察ほのフェロモントラップにおけるホソヘリカメムシ成虫の初確認時期は、6月6半旬 (平年7月1半旬) で早く、7月1～5半旬の総誘殺数は33頭 (平年11.4頭) で多かった (/+)。

ウ 予察灯調査 (6地点) における7月1～4半旬の総誘殺数は0頭 (平年2.3頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤などで防除する。

イ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンエアー、トレボンスカイMCのいずれかを2回散布する。

ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 フタスジヒメハムシ	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 前年収穫期の被害粒率から越冬量はやや多いと推定される (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア アグロスリン乳剤やトレボン乳剤などでマメシクイガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 マメシクイガ	平年並（前年並）	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 成虫の羽化は日長に影響されるので、発生時期の変動は小さい（±/ ）。
イ 前年収穫期の被害粒率から越冬量は平年並と推定される（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 連作により密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。
① アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は、８月下旬～９月上旬に１回散布する。
② トレボン剤、プレバソフロアブル５などは９月上旬に１～２回散布する。ただし、前年多発しているほ場では、２回散布する。
③ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソフロアブル５のいずれかを９月上旬に２回散布する。
イ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ダイズサヤタマバエ	－	やや多い（－）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
イ ７月中旬のえだまめの巡回調査における被害莢率は0.0%（平年0.1%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 開花日10日後頃にアルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、スミチオン乳剤などを散布する。
イ 無人航空機で散布する場合は、スタークル液剤10/スタークルメイト液剤10を開花日10日後頃に散布する。
ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 食葉性鱗翅目幼虫	－	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
イ ７月中旬のえだまめの巡回調査における発生茎率は1.0%（平年2.2%）で平年並、食害茎率は46.5%（平年29.4%）でやや高かった（ /+）。
ウ 予察灯調査（６地点）における７月１～４半旬のツメクサガの総誘殺数は０頭（平年1.7頭）でやや少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、ブロフレアSCのいずれかを散布する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒斑病・葉枯病	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /＋）。

イ ７月４～５半旬の巡回調査における発病株率は2.0％（平年7.4％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 適正な肥培管理を行う。

イ 両病害は病徴観察による識別が困難なため、両方に効果があるアミスター20フロアブル、カナメフロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルなどに展着剤を加用して散布する。なお、収穫時期が近い場合は、使用時期や使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ７月４～５半旬の巡回調査における食害株率は39.8％（平年26.6％）で高かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

ア アグロスリン乳剤（ＲＡＣコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナＳＣ（同：5）、ファインセーブフロアブル/アベンジャーフロアブル（同：34）、ベネビアOD（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロッソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ネギハモグリバエ	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ７月４～５半旬の巡回調査における食害株率は1.9％（平年7.9％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（ＲＡＣコード：3A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダブルシューターＳＥ（同：5・未）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナＳＣ（同：5）、ベネビアOD（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロッソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプＢ）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シロイチモジヨトウ	－	多い（－）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ７月４～５半旬の巡回調査における食害株率は1.1％（平年0.0％）で高かった（ /＋）。
- ウ 防除適期決定ほ（２地点）のフェロモントラップにおける７月１～４半旬の総誘殺数は277頭（前年142頭）だった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 幼虫が作物内に食入し薬剤がかかりにくくなったり、老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するので、発生初期にアグロスリン乳剤（ＲＡＣコード：3A）、ゼンターリ顆粒水和剤（同：11A）、ノーモルト乳剤（同：15）、ディアナＳＣ（同：５）、ベネビアＯＤ（同：28）などを散布する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。
- ウ 薬剤の感受性低下が疑われる事例があるため、使用薬剤の選定に注意する。

D ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒斑病・葉枯病	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /＋）。
- イ ７月４～５半旬の巡回調査における発病株率は0.8％（平年2.6％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ７月４～５半旬の巡回調査における食害株率は25.9％（平年16.0％）で高かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ネギハモグリバエ	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ 7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は2.1%（平年3.9%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シロイチモジヨトウ	－	多い（－）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は1.1%（平年0.1%）で高かった（ /+）。

ウ 防除適期決定ほ（2地点）のフェロモントラップにおける7月1～4半旬の総誘殺数は277頭（前年142頭）だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ねぎ（夏どり）に準じる。

E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 べと病	－	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は9.0%（平年16.1%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 敷きわらなどを行い、雨による土のはね上がりを防ぐ。

イ 発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゾーベックエニベル顆粒水和剤（同：49・M3）、ベトファイター顆粒水和剤（同：27・40）、ホライズンドライフロアブル（同：27・11）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などの治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

オ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが4、11、21、40、49の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 うどんこ病	－	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年0.4%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、トリフミン剤（同

：3）、パルミノ（同：M10）、ポリオキシシリンAL水和剤（同：19）、ポリベリン水和剤（同：19・M7）などの薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

イ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 褐斑病	—	多い（前年よりやや多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は0.5%（平年0.3%）でやや高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ 発病後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル（RACコード：M1・M5）、ジマンダイセン水和剤（同：M3）、セイビアーフロアブル20（同：12）、ダコニール1000（同：M5）などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤（同：10・2）など、治療効果のある薬剤を散布する。また、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ ベンゾイミダゾール系剤（RACコード：1）、SDHI剤（同：7）、QoI剤（同：11）では耐性菌が確認されているので、防除しても効果が低い場合は異なるRACコードの薬剤を選択する。

エ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 斑点細菌病	—	少ない（前年よりやや少ない）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年6.9%）で低かった（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 過剰施肥をしない。また、過繁茂を避け、通風を改善する。

イ 発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 銅水和剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。

エ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 炭疽病	—	平年並（前年よりやや少ない）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は0.1%（平年1.7%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病した葉や茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- イ ジマンダイセン水和剤や銅水和剤による予防散布に努めるとともに、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゲッター水和剤（同：10・1）など、治療効果のある薬剤を散布する。薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用は避ける。
- ウ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月後半の巡回調査における発生株率は2.6%（平年7.3%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の除草を徹底する。
- イ ウイルスの伝染を防ぎ、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。
- ウ 定期的に、コルト顆粒水和剤（RACコード：9B）、モスピラン顆粒水溶剤（同：4A）などを散布する。ただし、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ワタヘリクロノメイガ	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月後半の巡回調査における発生株率は0.0%（平年0.8%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。
- イ アファーム乳剤（RACコード：6）、グレースシア乳剤（同：30）などを散布する。ただし、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉かび病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年5.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 潜伏期間が2週間と長いので、発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ダコニール1000（同：M5）、ベルコート水和剤（同：M7）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 すすかび病	－	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0％（平年0％）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 潜伏期間が2週間と長いので、発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などを散布し予防に努める。発病が確認されたらニマイバー水和剤（同：10・1）、トリフミン水和剤（同：3）、ファンベル顆粒水和剤（同：11・M7）などを散布する。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 灰色かび病	－	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0％（平年2.8％）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ロブルール水和剤（同：2）、ベルコート水和剤（同：M7）、ミギワ10フロアブル（同：52）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。特にRACコードが1、2の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 うどんこ病	－	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0％（平年0％）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- イ 発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などを散布し予防に努める。発病が確認されたらパンチョTF顆粒水和剤（同：3・U6）、ラミック顆粒水和剤（同：M7・50）を散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、50の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 北秋田市防除適期決定ほにおける7月1～4半旬の青色粘着板への誘殺数は1,647頭（平年639.2頭）で多かった（ /+）。
- ウ 7月中旬の巡回調査における被害果率は0.2%（平年0.0%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
- イ ベストガード水溶剤（RACコード：4A）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、コテツフロアブル（同：13）などを花房に付着するように丁寧に散布する。
- ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

6 その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (ワタアブラムシ、 モモアカアブラムシ)	—	平年並	平年並	

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発生茎率は1.0%（平年2.2%）で平年並、食害茎率は46.5%（平年29.4%）でやや高かった（ /+）。
- ウ 予察灯（6地点）における7月1～4半旬のツメクサガの総誘殺数は0頭（平年1.7頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、プロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。無人航空機で防除する場合は、トレボンエアー、プロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ダイズサヤタマバエ	－	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における被害莢率は0.0%（平年0.1%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 中晩生品種では開花日（ほ場全体の50%程度が開花した日）10日後頃に１回、晩生品種では開花日７日後頃及び14日後頃にアルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤を散布する。無人航空機で防除する場合は、スタークル液剤10/スタークルメイト液剤10を開花日７日後頃及び14日後頃に散布する。
- イ 中晩生品種又は晩生品種でスミチオン乳剤、トレボン乳剤、ダイアジノン粒剤５を選択する場合は、開花日頃～開花日７日後頃に２回散布する。
- ウ 乳剤、顆粒水溶剤の散布液量は200～300 L/10 a とし、莢によく付着するように散布する。また、粒剤を使用する場合は、ほ場全体に均一に散布する。

H 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 オオタバコガ	－	やや多い（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ 防除適期決定ほ（３地点）における７月１～４半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は25頭（平年35.6頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害痕の近くには幼虫が潜んでいるので、注意深く観察し捕殺する。
- イ 初期被害の早期発見に努め、発生初期に薬剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ハスモンヨトウ	－	やや少ない（－）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ 防除適期決定ほ（２地点）における７月１～４半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は366頭（平年1,820.2頭）で少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害痕の近くには幼虫が潜んでいるので、注意深く観察し捕殺する。
- イ 初期被害の早期発見に努め、発生初期に薬剤で防除する。
- ウ 薬剤の感受性低下が疑われる事例があるため、使用薬剤の選定に注意する。

I りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点落葉病	—	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ７月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は2.4%（平年2.3%）で平年並、同地点率は70.0%（平年77.9%）でやや低かった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病部位を除去し、園地外へ搬出して適切に処分する。

イ ポリオキシシンAL水和剤（RACコード：19）、ユニックス顆粒水和剤47（同：9）を使用する場合は必ず保護殺菌剤に加用し散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、使用回数はそれぞれ１回とする。

ウ ポリオキシシン剤耐性菌発現園では、ベルコート水和剤、銅水和剤などの保護殺菌剤を主体に散布する。ポリオキシシン剤は使用せず、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）を使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒星病	—	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ７月中旬の巡回調査における発病新梢率は1.4%（平年2.5%）、同地点率は5.0%（平年14.3%）でいずれもやや低かった（ /－）。

ウ ７月中旬の巡回調査における発病果率は0.9%（平年0.3%）で高く、同地点率は5.0%（平年7.2%）で平年並だった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病葉、発病果は見つけ次第摘み取り、焼却などにより適切に処分する。

イ QoI剤（RACコード：11）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤に加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 炭疽病	—	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ７月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）、同地点率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。

イ 二次感染防止のため被害果は見つけ次第摘み取り、土中に埋めるなどにより適切に処分する。

ウ 防除薬剤は約２週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

エ QoI剤（RACコード：11）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤に加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4 輪紋病	－	平年並（－）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ 防除薬剤は約２週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ QoI 剤（RACコード：11）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤に加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 褐斑病	－	やや多い（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ７月中旬の巡回調査における発病新梢率は1.8%（平年0.2%）、同地点率は45.0%（平年2.3%）でいずれも高かった（ /+）。

ウ ７月下旬の横手市予察ほにおける新梢葉の発病葉率は6.6%（平年16.2%）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 枝が重なった部分に多発するので、不要な徒長枝を除去する。

イ 防除薬剤は約２週間間隔で散布するが、天候不順で冷涼、多雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ 多発が予想される場合は、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）又はオンリーワンフロアブル（同：3）を使用する。なお、同剤は耐性菌の出現を回避するため、必ず保護殺菌剤に加用し、使用回数は２回以内とする。

エ DMI 剤耐性菌が確認されている地域及びリンゴ黒星病防除にDMI 剤（RACコード：3）を使用した園では、褐斑病の防除にDMI 剤を使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ ７月中旬の巡回調査における被害果率は0.1%（平年0.1%）で平年並、同地点率は10.0%（平年3.3%）で高かった（ /+）。

ウ 防除適期決定ほ（４地点）における７月１～４半月のフェロモントラップへの誘殺数の合計は154頭（平年69.3頭）で多かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、６日以上おく。

イ ピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.8頭（平年0.6頭）で平年並、同地点率は75.0%（平年57.0%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- イ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。
- ウ エコマイト顆粒水和剤とダニゲッターフロアブルは、作用点が同一であるため、いずれか1回の使用とする。
- エ ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。
- オ オマイト水和剤は葉害（黄変落葉）が発生することがあるので8月中旬以降に使用する。
- カ 他の殺菌剤及び殺虫剤と混用する場合は次の点に注意する。
- ① コロマイト乳剤はストライド顆粒水和剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
 - ② カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
 - ③ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
 - ④ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
 - ⑤ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
 - ⑥ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における被害果率は0.6%（平年0.2%）、同地点率は40.0%（平年18.5%）でいずれも高かった（ /+）。
- ウ 防除適期決定ほ（4地点）における7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は1,370頭（平年73.3頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 7月25日発行の注意報第3号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9 キンモンホソガ	－	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ７月中旬の巡回調査における食害葉率は0.0％（平年0.3％）、同地点率は20.0％（平年26.2％）でいずれもやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。
- イ 発生が多い園地では、８月上旬にピレスロイド系剤（ＲＡＣコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。

10 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ハマキムシ類	－	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

J なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	－	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.1％（平年0.0％）で平年並、発病果率は0％（平年0.2％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病部位を除去し、園地外へ搬出して適切に処分する。
- イ オキシラン水和剤、オーソサイド水和剤80などを８月上旬まで10日間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	－	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 潟上市予察ほにおける７月中旬の発病新梢葉率は39.7％（平年17.7％）で高かった（ /＋）。
- ウ ７月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は1.0％（平年3.3％）、発病果率は0％（平年0.1％）でいずれもやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 本病の発生が多い品種は南水、八雲、二十世紀である。
- イ 枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除し、適切に処分する。

ウ オキシラン水和剤を8月上旬まで10日間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 輪紋病	—	少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 7月上中旬の降水量から、感染量は少なかったと推定される（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し、焼却処分する。幹や太枝は粗皮削りを行う。
- イ キャブプレート水和剤、オキシラン水和剤、オーソサイド水和剤80などを8月上旬まで10日間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。
- ウ 防除適期決定ほ（3地点）における7月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数の合計は114頭（平年64.9頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、6日以上おく。
- イ ピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。
- ウ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.1頭（平年0.0頭）でやや多く、同地点率は50.0%（平年21.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 徒長枝の切除、焼却を行い、夏期の発生源を少なくする。
- イ 発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。

エ 殺ダニ剤を使用する際は、次の点に注意する。

- ① コロマイト水和剤は高温・乾燥時や樹勢の弱っている場合は、葉に薬害（黄変落葉）を生じるおそれがあるので散布しない。
- ② ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	—	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ７月中旬の巡回調査における被害果率は０％（平年０.０％）、同地点率は０％（平年８.９％）でいずれもやや低かった（ /－）。
- ウ 防除適期決定ほ（３地点）における７月１～４半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は１,２５６頭（平年７４.２頭）で多かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア ７月２５日発表の注意報第３号を参照して防除する。

７ その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ハマキムシ類	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

K ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ベと病	—	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病葉率は０％（平年０.０％）で平年並だった（ /±）。
- ウ ７月中旬の巡回調査における発病果房率は０％（平年０％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア ベと病は雨滴のはね上がりで伝搬するので、敷きわらを厚く敷いておくと効果的である。
- イ ボルドー剤（ムッシュボルドーＤＦ、Ｚボルドーなど）を薬害（落葉）防止のため、クレフノン１００倍液を加用して散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 灰色かび病	－	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病葉率は0.5%（平年0.2%）でやや高かった（ /+）。
- ウ ７月中旬の巡回調査における発病果房率は0%（平年0.2%）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるので焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 晩腐病	－	少ない（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 開花前（５月下旬～６月上旬）の巡回調査における発病花穂率は0%（平年0%）、７月上旬の降水量は少なかったことから、感染量は少なかったと推定される（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病果房、巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は丁寧に取り、焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アザミウマ類 （チャノキイロアザミウマ）	－	平年並 （前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における被害果房率は0%（平年0.0%）で平年並だった（ /±）。
- ウ 防除適期決定ほ（２地点）における７月１～３半旬の黄色粘着板への誘殺数の合計は６頭（平年14.0頭）でやや少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発生が多い場合はアグロスリン水和剤（ＲＡＣコード：3A）、エクシレルＳＥ（同：28）、ディアナWDG（同：５）、モスピラン顆粒水溶剤（同：4A）などを散布する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

IV. 気象予報

令和7年7月24日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（7月26日～8月25日）

（1）予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
- ・ 太平洋高気圧に覆われやすい時期があるため、向こう1か月の日照時間は平年並が多いでしょう。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	10%	80%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	20%	40%	40%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

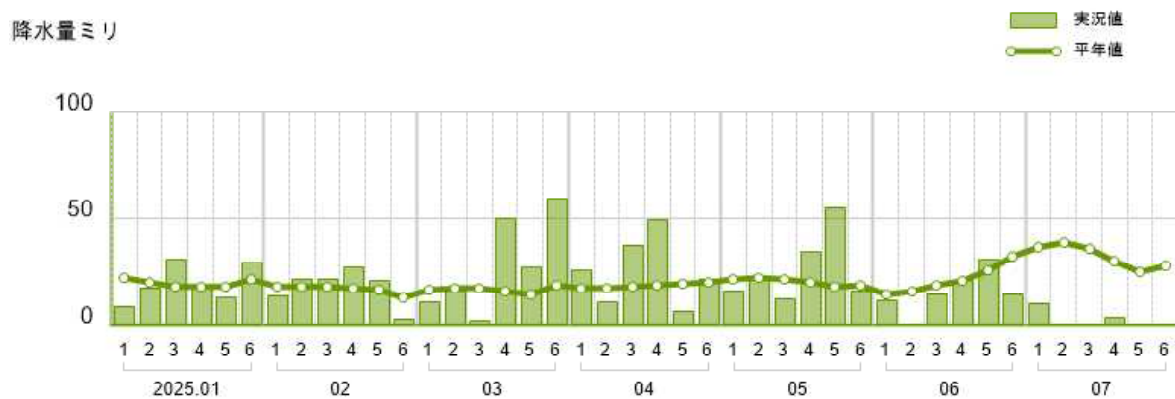
	低い	平年並	高い
7/26～8/1（1週目）	10%	10%	80%
8/2～8/8（2週目）	10%	10%	80%
8/9～8/22（3～4週目）	10%	30%	60%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

日数	～ -6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生 日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い			平年並					やや遅い			遅い

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40％で高い（多い）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

令和7年度秋田県農薬危害防止運動 ～農薬を安全に正しく使いましょう！～

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

誤飲を防ぐため、**施錠**された場所に保管する等
保管管理の徹底

確認しよう！
農薬ラベルによる
使用基準の徹底確認

使用前に必ずラベルで
作物名・使用方法・防護装備の
確認をしましょう！

誤飲防止のため
移し替えは**厳禁**！

**使用前、
周囲よく見て
ラベル見て**

農薬散布は
無風または
風が弱い時

看板の設置等
周囲に配慮

**土壌くん蒸剤を使用した
後の適切な管理の徹底**

土壌くん蒸剤
立ち入り禁止

住宅地等で農薬を使用する
際の**周辺への配慮及び
飛散防止対策の徹底**

近隣住民への
事前告知

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/

農薬の適正使用 農林水産省

検索



令和7年度農薬危害防止運動 農林水産省・厚生労働省・環境省・都道府県共催

秋田県・秋田県植物防疫協会
令和7年6月1日～8月31日

問合せ先

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224
かづの果樹センター TEL 0186-25-3231
天王分場チーム TEL 018-878-2251